

佳作

踏み出す勇氣

大阪府 大阪府立咲くやこの花中学校二年 宮城 一颯

その日、私は用事があって最寄り駅まで向かっていた。改札を抜けて、さあ階段をのぼって電車に乗ろうという時だ。上り階段の少し手前で、背の高い外国人の女性と男性が立っていた。どちらも神妙な面持ちで、手に持った地図と案内板を見比べては、何度も首をかしげている。その様子は、少し焦っているようだった。

「どうしよう、困っているのかな……」。そう思った瞬間、胸の奥がざわついた。そして同時に「いや、でも……」という迷いも浮かんだ。長い間英会話を習っていて、日常会話程度ならできる。英語は得意な方だ。しかしもし通じなかったら、恥ずかしい。それこそ相手をもっと困らせてしまうかもしれない。

そう悩んで一歩踏み出せずにいる間にも、二人は何度も案内板と階段の間を行ったり来たりしていた。

た。けれど、二人のたった一言の「ありがとう」が、こんなにも嬉しいとは思わなかった。

一瞬喜びで硬直してしまっただが、私は何か言わなきゃと思い、口を開いた。

「Have a nice day!」

「You too!」

そう交わした後一緒に階段をのぼり、電車が来るまでずっと喋っていた。やがて彼らの乗る電車がホームに入ってきて、二人は笑顔で手を振りながら乗り込んでいった。列車がゆっくりと走り出し、姿が見えなくなるまで、私は手を振っていた。

あのととき、もし声をかけなかったら、この温かい気持ちは味わえなかっただろう。

言葉が完璧でなくても、気持ちはきっと伝わる。少し踏み出したその勇氣が、誰かを救うことができるかもしれない。彼らがそう気づかせてくれたあの日から、私は「困っている人がいたらまず動くこと」を心に決めている。

女性の小さなため息まで聞こえてきて、私はその姿を見ていられなくなった。気づけば、足が勝手に動いていた。

「May I help you?」

口から出たその言葉に、自分でも驚いた。二人は一瞬きよんとした顔をしたが、すぐにパッと笑顔を見せ、男性が、

「Yes!」

と答えた。

英語と身振り手振りで二人の行き先を尋ねると、「Umeda.」

と返ってきた。梅田……ってことは大阪駅か。私は頭の中で大阪環状の路線図を思い浮かべ、説明した。

「Osaka Loop Line……」

「The next station……」

ゆっくりと話しながら、指で五駅先である

「Umeda」is「Osakaeki」.

と伝えた。説明の途中で男性は何度も「OK、OK」とうなずき、最後に二人は深々と頭を下げた。う言った。

「Thank you so much!」

その瞬間、心がふわりと温もりに包まれた。ほんの数分前まで、私は声をかけることをためらっていた。